

発達障碍の自立について考える

小林 隆 児

On Considering Independence of People
with Developmental Disorders

Ryuji Kobayashi

はじめに

このたびは九州自閉症研究協議会佐賀大会の会長古賀将之先生（西九州大学）のお招きでこのような場を与えていただいたこと、とても嬉しく思います。心よりお礼申し上げます。

私は25年間九州にいましたが、その後18年間九州を離れていまして、3年前に福岡に戻ったものですから、いまだにこちらでは浦島太郎の心境です。よって、日頃皆様方がどのような問題意識を持ちながら臨床実践に取り組んでおられるのかよく存じません。ここでは私が今どのようなことを考えているのか、今回の自閉症研究協議会のテーマ「自立」に焦点を当てながらお話しようと準備して参りました。

はじめに簡単に自己紹介をします。1975（昭和50）年3月九州大学医学部を卒業して福岡大学医学部精神医学教室に入り、当時助教授であった村田豊久先生（後に西南学院大学教授）から児童精神医学を学びました。実はその前、医学部の学生時代ですが、20歳になってまもなく、当時、九州大学医学部附属病院精神神経科外来で、土曜日の午後から開催されていた自閉症療育ボランティア活動に関わるようになり、そこで自閉症の子どもたちと出会いました。このボランティア活動は「土曜学級」と呼ばれていました。私が自閉症の子どもたちと初めて直接触れ合ったのはこの時です。以来45年間、自閉症の子ど

もたちから大人まで多くの人たちと付き合いってきました。ただ残念ながら、今から20年余り前に九州を離れましたので、当時お会いしていた子どもたちとはお別れせざるをえませんでした。しかし、3年前にこちらに戻ってから何人かの方とは再会を果たすことができ、とても懐かしく思いました。今回お話す内容は、九州を離れてから私が行ってきた臨床活動から学んだものが中心となります。そのため、私の話を初めてお聞きになる方の中には、戸惑われる方も少なくないかも知れません。日頃皆様が発達障害や自閉症についてお聞きになっている内容とは随分とかけ離れたものだと思うからです。

母子ユニットで開始した母子臨床

私は福岡大学に13年間在籍した後、大分大学で6年間過ごしました。そこで3年目位からでしょうか。今につながる活動を始めました。その後九州を離れて関東（神奈川県）の東海大学（健康科学部、伊勢原市）に移り、そこに新しい臨床の場を作りました。私にとっては臨床実験の場ともいえるものですが、母子ユニット（Mother-Infant Unit）、通称MIUと呼んでいました。母親と乳幼児を一組として捉えて臨床を行なうという考えに基づいたものです。これまで発達障害、自閉症などと言われてきた子どもたちが乳幼児期にどのような状態なのか、その実態を私は直接自分の目で確かめたいと思って始めたものです。そこで掴んだものを基盤にした臨床実践を行ないたいとの思いをとっても強く持ったからです。幸い東海大学に新しい学部を創設するというこで呼ばれたものですから、まったく新しい臨床実験の場を作ることができました。そこで私は14年間黙々と臨床活動と研究に取り組みました。

学会発表の場で受けたバッシング

皆様方はほとんどご存知ないかと思いますが、当時、私はMIUでの臨床活動を日本児童青年精神医学会でよく発表していました。そこでひどいじめを受けました。母親と子どもとの関係の中に、発達障害や自閉症といわれるもの

の芽を見出すことができるのではないかと私は考えて取り組んでいましたが、このような考えは、当時発達障碍や自閉症について多くの人たちが考えていた内容からすれば、まったくもってけしからん、というものだったのでしょうか。当時発達障碍や自閉症問題に母親を取り上げることはタブーとされていたのですね。だからでしょう。ものすごいバッシングを受けました。学会場で、名前は伏せますが、当時自閉症本の翻訳をした人、あるいは海外の治療法を紹介した人などから、大勢の聴衆のいる前で、「お前の考えは母原病の再来である」といった内容の非難を浴びせられました。それも数年にわたって続き、発表のたびに同じような目に遭いました。いつも壇上は私一人でした。これまた恐ろしいことに、私を擁護して発言してくれる人は誰一人いませんでした。私は針のむしろに座らされた心境で発表し続けました。自分が行っていることは間違っていないとの確信がどこかにありましたし、ここまで言われたからには途中で投げ出すわけにはいかないという自負もあったように思います。

なぜ MIU を作ったか

なぜ私が MIU という母親と子ども双方を取り上げる臨床の場を作ったか、その理由をまずお話しします。皆さんもよくご存知でしょう。自閉症の診断基準の冒頭に何が書かれているかと言いますと、「対人関係の質的障碍」です。「対人関係の障碍」というからには、少なくとも二者関係を想定しなければなりません。そこには子どもと親、あるいは子どもと私たちの双方を考えなくてはなりません。だから私は考えました。まずは関係の実態を予断や偏見なく掴むことが先決である。それなくしては何も始まらないと。これはごく当たり前の話ですね。しかし、残念なことに当時、いや今でもそうですが、誰も「関係」そのものを見ようとしません。

私が精神科医になった当時、ラターが言語認知障碍仮説を唱えていました。わが国にかぎらず世界中の多くの研究者はそれに飛びつきました。この考え方は、子どもの認知や言語の発達に問題があるから、結果的に、二次的に、対人関係の問題が生じるとする仮説です。信じられないほどにわが国のほとんどの

研究者がこの考えに飛びつきました。私は当時この考え方に異議を唱える論文（「言語障害像からみた年長自閉症児者に関する精神病理学的考察」児童精神医学とその近接領域, 23 (4), 235-260, 1982）を書いています。

脳障害は原因か結果か

この言語認知障害仮説の基本には、子どもの内部に何か言語や認知の発達を困難にする問題（障害 impairment）があると想定されています。この考え方がわが国でも急速に広まった結果、発達障害研究の大半は、その原因を脳に求めるようになっていきました。そのような研究は今でも量産され、その論文の数たるやとても読み切れないほどです。脳研究をやっている人たちは脳に障害があることを信じきっているようにみえるほどです。この数十年間に、たしかになんらかの脳障害があるとする知見は数多く報告されています。でも私はこのような知見をなんら不思議なものだとは思いません。といいますのも、検査をした時点で子どもの脳に何らかの障害を示唆する知見が発見されたとしても、それが発達障害の原因であると断定することは決してできないからです。卵子と精子の受精後今現在までの発達過程を見ずして、現時点での脳だけを見て、脳になんらかの障害があるとしても、それが原因であるとは絶対に証明できないからです。発達過程の中で様々な困難と出会い、その結果として脳になんらかの障害が生まれることは大いにありえます。それは原因ではなく結果として考えてなんら問題はないのです。脳障害が原因なのか結果なのか、突き詰めて考えていくと、誰も確かめようがないのですね。その点をぜひとも考えてほしいと思います。

皆さんもよくご存知かと思いますが、子ども虐待の結果、脳になんらかの障害が生まれることはいまや常識となっています。発達過程の中でいびつな体験をすれば、その後に脳になんらかの障害をもたらします。しかし、それは結果にしかすぎません。脳に原因を求めて探求し続けても、それが原因であるとする知見を見出すことは絶対に不可能です。それが原因であると証明する術はないからです。

乳幼児期早期の母子関係に何が起きているかを確かめたい

ここで大切なことは、可能な限り早期に子どもと彼らを取り囲む多くの人たち（多くの場合、母親とならざるをえないのですが）とのあいだでどのような体験が生まれているのか、そのことをこの目で直接確かめることです。子どもと母親とのあいだでどのような難しい問題が生まれているのか、そしてそれが加齢とともに、生活の中でさらなる難しい問題を生み出し、誰がみても発達障碍、自閉症と診断せざるをえないような病態へとどのようにして繋がっていくのか。その成り立ちを可能な限り直接観察によって確かめることが、発達障碍研究で飯を食わせてもらっている者たちの最低限のノルマだと思っていました。ちょうどその頃、東海大学で新しい臨床実験の場を持つ機会を与えてもらったものですから、MIU という場を作り、そこで直接この目で確かめたかったのです。ですから、そこではビデオ装置を設置し、録画したデータをご家族にも見てもらい、私たちは録画ビデオを何度も振り返り、そこで何が起きているかを確かめてきました。そのようなことを14年間やってきました。

その後、この研究成果をまとめなければならなかったのですが、日常の忙しさに追われてしまい、なかなかその作業に取りかかることができませんでした。東京での人間関係にも疲れてしまっていました。そのような時に、ある方から福岡に戻ってこないかというお誘いをいただきました。私はふたつ返事でお誘いを受けました。そのおかげで3年前に西南学院大学に来ることができました。福岡は以前25年間住んでいたところだったので、すぐに職場にも生活環境にも馴染むことができました。なんとといっても博多弁で気軽に人とコミュニケーションをとることができたことは私にとってこころのリフレッシュになりました。この仕事をまとめないと死ねないとまで思っていましたので、本当にありがたいことだったと今更ながら思います。

MIU の研究成果をまとめる

そこで14年間のMIUでの研究成果を、なんとか昨年（2014年）まとめる

ことができました。それがさきほど司会からご紹介いただいた『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』（ミネルヴァ書房）という本です。私はこの本で、MIU で出会った1歳から5歳までの55例の母子を直接観察し、そこで実際子どもと母親とのあいだでどのような関係のむずかしさが生まれているのか、そのありようを読者にわかってもらえるように、なんとか文章化してまとめました。これはものすごくしんどい仕事でしたが、やってみてほんとうによかったと思います。その中で実に多くのことを発見したからです。

母子関係を観察する枠組みとしての新奇場面法

MIU で母子関係を観察する際に私が用いた枠組みは、当時アタッチメント研究において世界中で用いられていた新奇場面法 (Strange Situation Procedure: 以下 SSP) でした。乳幼児を対象に、お母さんと一緒に過ごしてもらいますが、その際、母子分離を人工的に作って子どもを不安な状況に置き、そこで子どもがどのようにして不安に対処するかをみようとするものです。ただ、この枠組みを用いる際に、アタッチメントという行動に焦点を当てることに対して、私は大きな抵抗を感じました。

アタッチメントから「甘え」へ

アタッチメント attachment は、attach-、つまり「くっつく」という行動に焦点を当てたものです。そこに私は大きな問題があると考えたのです。子どもは不安な状況に置かれると、母親を求めて接近行動を取りますが、そのような行動は私たち日本人からみると子どもは母親に「甘えている」と感じ取ります。しかし、欧米ではそれをアタッチメントという観点から捉えようとします。ここには今日の学問の主流をなしている行動科学の考え方が如実に反映しています。こころの動きは主観であって恣意的であるため行動に特化して観察しなければ、客観的な指標とはならないという考えです。だから子どもの感情、気持ちを捉えずして行動ばかりに焦点を当てているわけです。したがってア

タッチメント研究では観察結果をアタッチメント行動パターンとして捉え分類しようとしています。しかし、SSPを観察すれば、誰でもごく自然に分かることですが、子どもは母親に「甘える」ということに気づきます。私たち日本人にとっては当たり前のことであるにもかかわらず、欧米の研究者がそれに気づくことがむずかしいのは、彼らには「甘え」の感情を実感として把握することが難しいからです。「甘え」は日本人にしか理解することはできません。日本人だけという用語があるかもしれませんが、私たち日本人は「甘え」ということばを持っていますので、子どものこころの動きを感じ取る際に、子どもが母親に接近する行動を「甘え」にまつわるこころの動きであることは誰にでもわかります。しかし、「甘え」ということばを持たない欧米人にはそれがわからないのです。

「甘え」を通してこころの動きを記述する

行動に特化したアタッチメントの行動パターンという見方をしていると、母子双方で流れている細やかなこころの動きを感じ取ることを困難にします。というよりも、そのような主観的なものはことさら意図的に排除しようとしています。私はこのことに強い疑問を持ちながら、SSPによる観察結果を可能な限りありのままに、つまりは母子双方のこころの動きを捉えて記述するように心がけました。

しかし、このことはいざやろうとすると、極めて困難なことであることもよくわかりました。なぜなら、子どもはまったくといっていいほど話さないからです。ことばのない世界での母子双方のこころの動きをことばで表そうとするわけですから、誰にとっても困難であることはすぐにおわかりでしょう。

乳児期にみられる「甘えたくても甘えられない」こころの動き

しかし、このような作業をやることによって私は非常に大きな手応えを得ることができました。それは何かと言いますと、0歳段階からすでに母親に対し

て子どもは非常にデリケートな反応をしていることがわかったのです。母親の前で子どもはまるで母親を求めているかのような行動を取りますが、いざ母親がいなくなると母親を求めて泣いたり不安な表情を浮かべたりするようになります。では母親が戻って来ると、母親を求めるようになるかという、そうではないんですね。いざ母親が相手をしようとして接近して触れ合おうとすると、子どもはさり気なくそっと母親から離れて行くんですね。こういう行動をとる子どもたちが大半なんですね。0歳台後半から1歳台の子どもたち皆にみられる共通した特徴でした。

そこで私は1歳台の子どもたちが見せる母親に対する独特な行動特徴は、「甘えたくても甘えられない」として表現することができるころの動きだと思ったのです。このような心理が母親に相対した時に常に起こると、子どもは母親に接近して抱っこしてもらうことができなくなります。そのためアタッチメント形成が生まれません。子どもは強い不安に晒されることとなります。これは子どもにとって大変な事態です。子どもに限らず誰にとっても絶えられないほどにづらいものだということは容易に想像できます。

「甘えたくても甘えられない」ための不安とその対処

このような事態に陥った人は誰でもがき苦しみ、なんとか少しでも不安を軽減しようと努めます。そのようなもがきの試みが2歳台の子どもたちに見られる一見不可解な行動であることがわかりました。さらに重要なことは、ひとりになった時に起こる不安を極力表に出さないようになるんですね。1歳台までは心細い反応を示しますが、2歳台になるとそれをあまり示さなくなります。それに代わって独特な行動を取るようになります。それは子どもなりの不安への対処としての行動だろうと思いました。その表現型は子どもによっていろいろです。そのことがSSPを用いて「甘え」の観点から観察することによってわかってきました。この知見は非常に重要なことを教えてくれます。それは何かと言いますと、人間は誰でも不安な状況に置かれたならば、なんとかして不安を軽減しようとしますが、その対処の仕方はさまざまで、それまでにどのよ

うな経験をしてきたかによって規定されるということです。母親との関係を回避しつつも、さぐりを入れるようにいろいろな方策を思いつくのですね。

甘えられないゆえに相手の顔色をうかがう

母子の組み合わせによって子どもはいろんな対処行動を取ることがわかっていきました。それはなぜかといえば、子どもが自分の「甘え」を満たそうとすれば、どうしても母親に求めなければなりません。自分ひとりで満たすことはできません。「甘え」の問題が難しいのは、「甘え」が満たされるか否かを決めるのは相手次第だからです。

子どもに「甘えたくても甘えられない」という心理が続くと、いつまで経っても甘えられません。そうであるならば「甘え」を諦めることができればいいのですが、それは誰もできません。なぜなら「甘え」は本能といってもいいほど人間の発達成長に不可欠なものだからです。そのため、「甘えたい」という気持ちはずっと持続しますし、甘えられないゆえにそれはますます強まっていきます。相手が自分を受け入れてくれるかどうか気になって仕方なくなります。そのため相手の一挙手一投足に非常に敏感になっていきます。相手は自分をどう思っているのだろうか、相手が自分に対してどう振る舞うのだろうか、いつも気になります。そのような心理を反映したものが、子どもの「相手（母親）の顔色をうかがう」振る舞いです。このような事態が進展していくと、子どもは相手の動きにいつも敏感に反応するようになり、その結果相手に支配されるような関係になります。ひどくなると相手に翻弄され、相手の意向にいと簡単に動かされる事態が生まれることとなります。このような状態が持続していけば、精神病（統合失調症）とみなしてよいほど深刻な自我障碍をもたらします。

「甘えたくても甘えられない」ゆえのさまざまな対処行動

「甘えたくても甘えられない」ために生じる不安に対処しようとして、子どもたちはどのような行動を取るようになるか、具体的に挙げてみます。

たとえば、ひとつのことを何度も繰り返して気を紛らわすようになります。母親から離れてひとりで同じことを何度も繰り返します。これは発達障害に特徴的で常同反復行動などと言われてきたものです。

子どもによっては、母親と微妙な距離を取りながら、母親の様子をうかがうようにしてさりげなく動き回っています。母親からみると、落ち着きのない子どもに見えます。多動とか注意散漫（注意転導）などと言われてきたものです。

さらには、母親の嫌がる行動をことさらやろうとします。母親の関心を引きつけるためです。これなどは「挑発行動」としてこれまでもよく指摘されてきたものです。

さらには、困ったことがあっても母親には一切頼ることなく自分ひとりで何事もやろうとします。ひとりでなんでもやるわけですから、母親からみると手のかからない子どもで、子育ては楽だったということになりますが、このような子どもはその後が大変になります。手がかからないということは甘えることができなかったことを意味しますから、喜んでいる場合にはありませんね。

関係を繋ぎ止めるための対処行動

同じことを繰り返したり、落ち着きなく動き回ったりする、相手の気を引こうとする行動をとる、といった対処行動は、医療現場では間違いなく発達障害ないし自閉症などと診断されてきた行動特徴です。乳幼児期早期に母子関係に問題をもつ子どもたちの多くはこのような状態を呈して、発達障害と診断されることが多いのですが、私が今回の研究でわかったことの最も重要な知見の一つは、そのような場合だけではないということです。それは何かと申しますと、なんとか母親との関係を繋ぎ止めるために、その他にもいろいろな対処法をとることがわかったのです。

母親に気に入ってもらえるように、褒められるような行動を取ろうとする。いわば「いい子になる」ということですね。こうなると、周りの人たちからみると、発達障碍にはみえないことになります。しかし、その背後に「甘えたくても甘えられない」という心理が強く働いていることを忘れてはいけません。このように2歳台になると、単に発達障碍（といわれてきた状態）らしくなる一群のみでなく、発達障碍らしくない、ある意味では過剰適応とも思える一群も生まれることを知っておく必要があります。

その他にもとてもデリケートで驚くような行動を取ります。母親の気を引くようにして、赤の他人にすり寄ってわざとらしく甘えてみせる、あるいは母親の機嫌を取るようにして甘えてみせる、などといった行動です。これらの仕草を見てみると、前者は「見せつける」、後者は「媚びる」といえるものです。私たちにもよくわかる心理ですが、2歳台の子どもたちが母親に対して「甘えたくても甘えられない」時に、このような大人顔負けの仕草をとるんですね。1歳、2歳時に母親の前で見せていることは大変な驚きです。いかに子どもたちが必死の思いで生きようとしているか、その健気な姿に心が打たれます。

発達障碍概念のひろがり

今日の臨床精神医学界での大きな話題のひとつが発達障碍です。大人しかみていない精神科医のあいだでも発達障碍が話題になり、子どもから大人まで、従来の精神障碍の診断分類ではどこに入れたらよいかわかりづらい事例の多くが発達障碍として扱われるようになっていきます。今や何でも発達障碍ですまそうとする傾向が非常に強まっています。子どもの発達障碍への関心が高まることはある意味ではいいことでもあるのですが、私が最も懸念するのは、発達障碍との診断がなされると、そこで患者理解は停止してしまい、その原因を脳障碍に帰してしまうことです。

本日私は子どもたちが乳児期に「甘えたくても甘えられない」体験をすることがのちのち発達障碍とみなされる病態へと進展していくことをお話しました。皆さんの中には、おそらく疑問を呈する方々も少なくないのではないかと

思います。確かに乳幼児期に「甘えたくても甘えられない」体験をすることが発達障碍につながることは理解することができるとしても、思春期・青年期以降の発達障碍をはじめとする多様な精神障碍についても本当にそのようにいえるのか、という疑問ですね。「甘えたくても甘えられない」という、ある意味では程度こそ異なっても誰もが経験することですから、そのことがその後の精神障碍に繋がるということはとても理解しがたいという思いを抱かれるのももっともだろうと思います。

成人の発達障碍でよく取り上げられる「字義拘泥」

大人の発達障碍が疑われる時に必ずといっていいほど取り上げられる症状のひとつが「字義拘泥」というものです。「字義拘泥」は「字義へのこだわり」ないし「字面の意味にとらわれること」です。この症状は発達障碍に特徴的な言語障碍とされてきました。よく例として取り上げられるのは、「お風呂をみてきて」と言われた子どもがお風呂を見てきたけどもそれだけで、母親が言いたかった湯加減をみることはしなかったような場合ですね。このような言語の特徴があると恐らく大半の精神科医は発達障碍と診断するでしょう。

しかし、「字義拘泥」は何も発達障害にのみ関係したものではないのですね。たとえば、おれおれ詐欺などを見てみると、いかに人間は相手の言ったことばを真に受けて反応しやすいかということがよくわかります。誰にとっても他人事ではないのです。

そこで「字義拘泥」という現象が、「甘え」の問題とどのようにつながるのか、ここでちょっと考えてみたいと思います。そのことによって、今日の発達障碍概念の拡散とその他の精神障碍との関係の混乱に対して、多少なりとも整理できる方向性が見えて来るのではないかと思うからです。

ことばの有無によるコミュニケーションの質的違い

まず考えてみたいのは、コミュニケーションということについてです。普段はあまり意識することがありませんが、コミュニケーションはことばのみでなく、ことば以外の次元が深く関係して展開していることがわかります。ことばのない世界でのコミュニケーションは、非言語的コミュニケーションとか情動的コミュニケーションとかいわれているものですが、このようなコミュニケーション世界は、私たち日本人が一番敏感に感じ取れる国民ではないかと（なかったか）と思います。「甘え」の世界は、その代表的なものですね。「甘え」はいまだことばが生まれる以前の相手に向ける情動の動きですね。「甘え」は私たち日本人であれば容易に感じ取ることができます。SSPのビデオを素人同然の学部の学生さんに見せても、同じように感じ取ることができますから。

「甘え」という情動次元のコミュニケーション

しかし、残念なことに今の学問の世界では、先ほどもお話したように、こういう目に見えないもの、客観的でないものはすべて無視されているんですね。こころの動きはみないで、行動だけを見る。なぜなら行動は誰にでも同じように観察可能だから、というわけです。行動科学という学問が今日隆盛を誇っていますが、その大きな理由はそういうことなんですね。しかし、よく考えてみてほしいのですね。日頃実践を行なっている皆さん方は、発達障碍といわれる子どもたちと関わりながら、多くのことを感じ取りつつ実践しておられると思います。そこで感じ取ったことはすべて主観的な事柄だからと捨てて、行動だけをみなければ駄目だというのですから、随分とおかしなことだと思いますね。このような事態に対して、学問の世界では「生活世界」から遊離しているとして、強い危機感を抱いている人たちも少なからずいますが、では具体的にどうすればよいのか、そこに踏み込んで論じる必要があると私は思っています。ここではこれ以上この問題には触れることはできませんが、このことについては、緻密な学問的議論が必要です。今年の秋までには出版するべく準備をしている

『人間科学におけるエヴィデンスとは何か』（小林隆児・西研編）（新曜社、近刊）という本においてしっかり考えてみようと思っています。

「甘え」からみた「字義拘泥」のもつ意味

ちょっと話が逸れましたが、再度発達障碍の話に戻ります。おとなの発達障碍でよく指摘される「字義拘泥」についてでしたね。なぜ「字義拘泥」という状態が起こるかを考えていましたね。

「甘え」の世界とは情動次元のコミュニケーション世界です。皆さんは「甘え」について子ども時代により経験をなさった方が多いでしょう。そのような方にとっては「甘え」の世界に身を委ねることの心地よさは経験的によくわかる話ですね。大人の男女の世界を想像してみるとなお一層よくわかるかもしれません。恋愛は大人の「甘え」がよく反映されるものですから。

しかし、発達障碍の子どもたちは、母親に対して「甘えたくても甘えられず」、「甘え」を出さないようになります。だから、たとえひとりになって不安になっても、母親の前ではまるで何事もないかのような態度をとって「甘え」を見せません。おそらくそれはよくないことだと思わざるを得なくなった体験が過去にあったからだろうと思います。

多くの人にとって心地よい「甘え」の世界に身を委ねることが、「甘えたくても甘えられない」人たちにとってはとても怖いことなんです。なぜなら「甘え」の世界は情動というある意味かたちのない不確かな世界ですから、相手以外に何も頼るものがない。「甘えたくても甘えられない」人にとって相手は甘えられない存在ですから頼ることはできない。だから彼らが頼りにするのは、相手以外の目に見えるようなかたちあるものになります。それにしがみつこうとする。そのひとつが「ことば」なんです。ことばは誰にとっても目に見えるかたちで掴み取ることができるような性質のものです。だからどうしてもことばにしがみつきたくなる。このような心理は、けっして発達障碍といわれる人たちの専売特許ではありません。私たちが情動の世界の不確かさを避けて、ことばに頼ろうとすることはけっして少なくありません。ことばにすれば、

一時的にしろ、どこか安心を得ることができます。その極端な状態にあるのが「字義拘泥」です。

発達障碍の人たちを例に取り上げましたが、このような現象は私たちにおいても状況によっては同じように認めることができます。発達障碍の子どもたちが突然私たちに「〇〇さん、何歳？」と執拗に何度も尋ねることがあります。そうすると、私たちはどうしても「〇〇歳」と答えてしまいます。でも「〇〇歳」と答えたからといって彼らは満足して質問を止めようとはしません。同じ質問を繰り返します。彼らは相手の年齢が聞きたくてこのような質問をしているのではないからです。

「質問癖」と私たちの字義へのとらわれ

ひとつ最近経験した分かりやすい例を取り上げてみます。10歳の男児で3歳の時に私は自閉症と診断して以来、ずっと今日まで付き合っています。つい最近まで男児は臨床心理士が、母親の面接を私が行なっていました。しかし、次第に年長になり、男児も自分でかなり語ることができるようになってきましたので、1対1で彼と面接を試みようと考えました。そこで面接をしよう前回にあらかじめ伝えていました。そこで当日、彼に声を掛けました。すると彼は待合室の雑誌棚に置いてあったある雑誌を取り出し、それを手に持って面接室に入ってきました。そして座るなり、その雑誌に書かれている文章を取り上げて、「…はどういう意味？」と私に質問を始めたんですね。そこで私は思わず彼の質問に真面目に応答しようとして記事の内容を読み、「そうね…」と言いながら、私の乏しい知識を総動員してなんとか答えなければという誘惑に負けそうになりました。しかし、しばし考えて、その質問には答えないようにしました。おそらく記事の内容を知りたくて質問をしているのではないだろうと思ったからです。私もそうでしたが、初めて1対1で面接するわけですから、彼の緊張はいかばかりかと想像していました。そう考えると、私の気持ちにゆとりが生まれ、どうすれば彼の緊張を和らげることができるかということに思いがいくようになりました。そこでしばらくはこちらから言葉をかけることを

避けて、ゆったりとした雰囲気になるように努めました。何度も彼は質問を繰り返していましたが、まもなく彼は苛立つことなく質問をしなくなりました。そこで私はおもむろに穏やかな口調で話しかけてみました。すると、彼は私の質問に言葉少なですが、素直に答えてくれるようになったのです。私の質問を良く聞いて、的確に答えてくれていることがわかりました。その後の彼との面接は私にとって楽しみのひとつになりました。

この経験から私が教えられたのは、彼は私との初めての面接で緊張が高まっていたのです。そこで緊張を少しでも和らげようとして、このような質問を繰り返すようになったということです。なぜなら自分から質問をすることによって、相手を自分のペースに巻き込むことができます。そうすれば相手からいつ何が語りかけられるか分からないという恐怖から逃れることができる。おそらくはそのような心理が働いたからなのではないかと思ったのです。

こうしてみると、私たちが子どもたちのことばを字義通りに受け止めて頓珍漢な応答を繰り返していることは決して少なくないと思うのです。そのようなことが両者のあいだに起これば、字義にばかり頼ったコミュニケーションは強まって行きます。その結果が「字義拘泥」という病態として理解することができます。子どもの脳障害によって「字義拘泥」が生まれるわけではありません。「関係」の視点からみれば、そのことがよくわかります。したがって、その治療を考えると、そこで生まれている「関係」の悪循環を無くすことが大切になります。それを断ち切るためには、私たちこそ字義に囚われず、彼らのこころの動きに同調した対応が求められます。そうすれば彼らの「字義拘泥」という状態は次第に目立たなくなっていくと思うのです。

「自立」と「依存」

今回の九州自閉症研究協議会のテーマは「自立」です。私がMIUでの研究で明らかにした2歳台の子どもにみられる不安への対処法としての「困ったことがあっても母親には一切頼ることなく自分ひとりで何事もやろうとする」という行動は見方によっては「自立的」と映るかもしれません。母親にしてみれ

ば、手のかからない子どもだったわけですから。しかし、それは本当の意味での「自立」ではありませんね。人間誰しも不安になった時には、まずは最も身近な存在に頼る（甘える）ことによって、不安を鎮めるという体験が大切です。そうすることによって、頼ることの心地よさを経験することになります。頼ることがあってこそ、他者に対する信頼感が醸成されていきます。母親とのあいだで最初にこのような体験をすることによって、母親に対して基本的信頼感が育まれていくことはよく知られていますね。逆説的に聞こえるかもしれませんが、「甘え」ないし「依存」を知らずして本当の意味での「自立」は生まれえないということです。

「自立」 independence と「依存」 dependence と「甘え」

「自立」は independence の訳語ですね。in+dependence、つまり dependence 「依存」の (in-) 否定ですね。欧米では自立した自我、というものがとても大切にされています。「依存」は忌み嫌われ、好ましいものではないとされています。ですから「自立」が重んじられているのです。日本語「甘え」は「依存」と同義ではありませんが、「甘え」は日本語にしかないため、英語に翻訳する際には dependence とせざるをえません。欧米では「甘え」の重要さは理解されませんし、independence を重視する文化を持ちます。

しかし、私たちは「甘え」という観点から発達障碍といわれている子どもたちを見ていくと、「甘えたくても甘えられない」状態にあることがわかります。であるならば、私たちが彼らにまずもって援助すべきことは、「甘えても大丈夫だ」ということを経験的に分かってもらうことです。彼らは「甘えることはよくないことだ」という思いを強くもち、それに強く縛られていますから、そこから解放してやらねばなりません。「甘えても大丈夫だ」「甘えるということはこんなに気持ちいいものなんだ」ということを体感してもらわねばなりません。それが発達障碍の人たちにまずもって行なうべき援助なのです。それなくして彼らの自立を目指そうとするのはとんでもない考え違いだと思います。このところを発達障碍の支援や治療の根幹に据えなければならないと思うので

す。ただ「甘えたくても甘えられない」子どもたちはすでに1歳、2歳になると、「甘え」を表に出そうとしなくなります。だから「甘え」に焦点を当てた支援は難しいのです。

「自立」の前に「甘え」の心地よさを体験できること

成長した思春期・青年期、さらには成人期の発達障碍とされる人たちと接していると、いろいろなかたちで「甘え」の問題が彼らの対人的態度によく現れるのです。そういう観点からみていけば、彼らの「甘えたくても甘えられない」心理を読み取り、「甘えても大丈夫だ」という思いを経験してもらうための治療戦略も見えてきます。ここでの治療や支援のポイントは、彼らの「甘え」を出すことに対する強い恐れをいかにして和らげ、「甘え」を出しても大丈夫なのだという経験をしてもらうかということです。そのためには、「甘えたくても甘えられない」彼らが不安への対処として取っている様々な言動の背後に動いている「甘え」を私たちが感じ取り、さりげなく相手も気づけるようにしてあげることです。自分の「甘え」に気づいてもらい、それはけっして恐れることではないんですよ、と伝えてあげることです。

なぜ私がこのような「甘え」の問題を取り上げるかといえば、どんな精神障碍においてもこのことが根本の問題であることを掴んだからです。ここで私が危惧するのは、このように語ると、多くの方は「では彼らを甘えさせればいいのです」と短絡的に理解されるのではないかということです。それほど単純ではありません。彼らは「甘える」ということに対する強い恐れを抱いていることです。このことをよくよく理解しておくことが必要です。さらには「甘えたくても甘えられない」子どもたちを見ていく際には、相手である母親（さらには私たち）も子どもを「甘えさせたくても甘えさせられない」という心理が働いていることが多いということです。「甘え」という観点でみていく場合に大切なことは、先にも言いましたが、「甘え」が受け入れられるか否か、それを決めるのは相手だということです。『甘え』は相手があって初めて可能です。相手次第というところが味噌なんですね。

「甘え」の問題は生涯にわたる

子どもが「甘え」の問題を抱えている場合、必ずそれは一見すると理解困難な振る舞いとして現われます。「甘え」そのものがわかりやすいかたちで表に出ることはまずありません。だから難しいのですが、さらに難しくさせているのは、「甘え」の問題に気づくためには、私たち自身がそれを感じ取るしか術はないからです。つまり私たちの感性が求められます。

現場で皆さんが苦勞されている発達障碍の人たちにおいては、激しい行動障碍などは珍しくないでしょう。その対応に苦慮されることが多いわけですが、ここで考えて欲しいのは、私たちのところの中にも自立を促さねば、という思いがとても強いことです。彼らはいろいろなことができない。だから自立できるように援助・指導しようとしています。このような働きかけ、つまりは彼らに何かできないことをできるようにしようとする働きかけは、彼らにとって最も恐ろしいことなのです。自分が相手の働きかけによって動かされるという体験になります。自分を主張することがもっとも困難な彼らですから、どうしてもこのような強い働きかけに抗うことはできず、つい動かされてそのようにさせられることになります。このように何かをさせられるという体験はのちのち彼らの中に強いフラストレーションを生み、いつしか爆発する危険性がとても高くなります。

一般の発達障碍理解では、彼らは何かができないからこのような状態にあるのだ、という障碍を子ども自身の中にもみようとする考え方が非常に支配的です。しかし、この講演で私が皆さんにお伝えしたかったことのひとつは、彼らが0歳台、1歳台に母親に「甘えたくても甘えられない」がために、関係がねじれ、その結果発達障碍とみなされる^(註1)状態を呈するようになるのだという理解です。このように考えると、彼らに何ができないかという視点から捉えるのではなく、私たちとの関係を難しくしているのは何か、という「関係」の視点から理解しようとするようになります。そこでは必ず私たち支援する側の者が介在しますので、自分との関係の中で彼らのところを理解しようとするようになります。このような視点の獲得がとても大切なのです。

「甘え」という視点から彼らの生涯発達を理解していこうとする試みを論じたのが『甘えたくも甘えられない』（河出書房新社）という本ですが、0歳台、1歳台に体験する「甘え」の問題が彼らの生涯にわたって様々な臨床的問題として顕在化するということを論じたものです。ご参照いただければありがたいです。

「甘え」の問題は母親のみならず私たち自身の問題でもある

最後に述べておきたいのは、乳幼児期の子どもたちの「甘え」の問題を母親との関係から見てきましたが、これは母親だけの問題ではありません。日々彼らと臨床の場で接している私たち自身の問題でもあるのです。つまり「甘え」の問題は必ず「関係」という視点を要求されますが、それは母親のみならず私たち自身の問題でもあるのです。そこで注意してほしいのは、子どもの「甘えたくても甘えられない」問題には、その組み合わせとして、子どもの相手をする人たちに「甘えさせたくても甘えさせられない」という心理が強く働いていることが多いということです。私たち自身の中に「甘えさせたくても甘えさせられない」心理が起りやすいのは、「甘え」に対してどこかよくないことだ、といった否定的な価値観がある場合です。このような人たちでは、子どもの「甘え」にまつわる行動に対していたく鈍感で、どうしても何ができるかできないかという見方をとりがちです。このような思いが強く働くと、子どもたちの「甘え」の行動をつい否定的に捉えてしまい、何かをさせようとする働きかけになりがちです。

今日の発達障害理解は脳障害ゆえに起こる精神障害であるとする仮説がまかり通っていますので、どうしても何かできないことができるようになるような働きかけをしがちです。私が提唱している「甘え」という視点は私たち日本人には経験的にとてもよくわかるものです。なんら難しいことではありません。本日の私の話が皆さんの日頃の実践にとって少しでもヒントになれば、と思っています。本日の講演はこれで終わります。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

(注1) 本文で私が「発達障碍とみなされる」「発達障碍といわれている」などと表現しているのは、発達障碍という疾病概念がまるで脳障碍を基盤にもつ独立した疾病であるかのように思われていることに対する批判を込めているからです。発達障碍の概念はこの半世紀以上信じられないほど大きな変遷を遂げています。今や発達障碍という疾病概念は患者理解にとって積極的な意義を持つものではなくなりつつあると私は考えています。

本稿は「自立のためのソーシャルサポート・ネットワークを考える」を大会テーマとして開催された九州自閉症研究協議会第39回佐賀大会(2015.3.15、アバンセにて、佐賀市)における特別講演「甘えたくても甘えられない-発達障碍の自立をどう考えるか」の内容を大幅に加筆し改題したものです。このような機会を与えて頂いた古賀将之教授(西九州大学大学院臨床心理学専攻)に厚くお礼申し上げます。

西南学院大学人間科学部社会福祉学科